

令和5年度第1回
大崎上島町総合教育会議会議録

令和5年11月7日（火）開会

大崎上島町教育委員会

令和5年度第1回大崎上島町総合教育会議出席者名簿

令和5年11月7日(火) 10:00 開会
11:20 閉会

1 出席者	町 長	谷川 正芳
	教育長	恵良 隆久
	教育長職務代理者	取釜 秀子
	委 員	高田 康平
	委 員	瀧口三千弘
	委 員	不二川 晃
	教育課長	有田 芳徳
	社会教育係長	馬場 法澄
	総務学校教育係長	神垣 憲隆

(傍聴者 3名)

令和5年度第1回大崎上島町総合教育会議 日程

開催日時：令和5年11月7日（火）
10：00～

1 開 会

2 町長挨拶
教育長挨拶

3 議 事
協議1 「少子化に伴う教育のあり方」について

4 その他

5 閉 会

1.開会	教育課長	ただいまから令和5年度第1回大崎上島町総合教育会議を開催します。本会議は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第1条の4第6項の規定により、原則として公開となります。会議の開催にあたりまして、谷川町長からご挨拶があります。
	町長	～ あ い さ つ ～ 次に恵良教育長からご挨拶をお願いします。
協議1	教育長	～ あ い さ つ ～
	教育課長	本日の出席者につきましては資料に添付しておりますのでご紹介に変えさせていただきます。それでは、要綱第5条の規定によりまして、ここからは町長に議事の進行をお願いします。
	町長	はい、それでは要綱に従い進行を務めますので、ご協力をお願いいたします。早速議事に入りたいと思います。協議1「少子化に伴う教育のあり方について」を事務局から説明をお願いします。
	教育課長	「少子化に伴う教育のあり方について」ということで、資料の1、2をご覧ください。こちらは先般の教育委員会定例会議においてもお配りしたものでございますが、本日の総合教育会議においても同じ資料で説明させていただきます。資料1の表1の人口推移ですが、平成26年度から令和5年度までの出生者数を記載しております。令和5年度における出生者数が6人という衝撃的な数字が出てきたこともあり、先般の9月町議会においても少子化に伴う学校のあり方について一般質問が出てきたところです。平成26年度から平成31年度までは30人前後の出生者数が続いており、令和2年度、令和3年度と20人台、令和4年度では14人となっております。表2の今後の小学校入学予定者数では、表1での出生者がそのまま小学校に入学することを想定した数字となっております。令和6年度から令和12年度まで記載しております。表3の小中学校児童・生徒数推移では、現在の小中学校における平成30年度から令和5年度までの児童・生徒数を記載しております。続いて資料2では、各小中学校において令和6年度から令和11年度まで想定される児童・生徒数の推移を掲載しております。令和6年度ですと3小学校で184人ですが令和11年度には139人まで減少する想定となっております。これらの数字を念頭におきながら少子化に伴う教育のあり方についてご意見等を頂戴したいと思います。
	町長	ありがとうございました。この件につきまして、委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。
	高田委員	周りを見てもどんどん子どもが減っている。急に何か対策ができるというのは難しいのではないかと。大崎海星高校には島に残りたい、島外から島に来て島に残りたい、実際島に残っている生徒もいるが、そういう島に残りたい人を支える方法が何かあれば、急激な児童生徒数減少に歯止めがかけられるのではないかと。
瀧口委員	少子化は島だけの問題ではなくて、日本中どこでも起きていて統廃合等進んでいる状況。統廃合をいきなり考えるのも一つの手段かもしれないが、まずは小さな学校大きな学校のメリットデメリットを考える必要がある。文科省の適正規模とは、11学級以下が小規模校、5学級以下は過少規模校、令和3年度調査によると日本国内で小規模校が約2万校弱、そのうち50%くらいの学校が過少規模校。今島の学校では過少規模校のデメリットをメリットに変えていこうという取組がなされており、学校訪問では児童	

協議1	瀧口委員	<p>が少なれば少ないの取組をされていたのが伺えた。最近ではGIGA スクール構想の中で ICT を活用し、他校と連携・交流することが可能になってきており、小規模校のデメリットもデメリットではなくなっている。新しい取組というのは賛否の声が出てくるもの。福山市の常石ともに学園では「イエナプラン教育」、神石高原町にインターナショナルスクールができています。その他小中一貫校への取組もされており、各地域で地域にあった取組をされている。この島では海星高校の寮の新設や叡智学園は全寮制であるように、今島にいる子どもたちだけではなく、島外からも人を呼べるような発想も入れながら議論したほうがよい。商船高専も元々は全寮制だったが、学校の体制や寮の改革などを行い、今また生徒数が増えてきている。このような海星高校や叡智学園、商船高専が行っている生徒を増やしていくという方法も一つあるのではないかと。また統廃合を考えたとき、地域から学校がなくなるという心配もあるだろうが、本町では中学校が統廃合したときにすでに経験しており、そういったことも乗り越えてきた歴史がある。学校が地域からなくなることによって、文化や伝統を守ることができなくなるという声もあるが、やり方を工夫すれば文化や伝統を守っていくこともできるのではないかと。今後、子どもの数は確実に減っていくわけなので何か大きな変化をしなければいけない、新しいことを考えないといけない時期に間違いなくきている。</p>
	取釜委員	<p>適正な規模という数字は決まっているが、一人ひとりに応じたきめ細やかな指導をしていくことが子どもにとって大切なのではないかと。最近では困りごとを持つ子どもが増えてきているが、そのような子どもたちにも皆とともにしっかり歩んで力強く生きていくという力をつけてあげるべき。木江小学校であれば海が見えて島の学校というものを感じられるし、東野小学校であれば ICT を活用した取組をやっておられるが、このようにそれぞれの学校の特色を活かして子どもたち一人一人に応じたきめ細やかな指導ができるような学校を目指してほしい。子どもたちのことを一番に考え、地域の中でしっかり伸びていける環境を我々大人が作っていかねばいけない。</p>
	不二川委員	<p>子どもが減少していく中で、今後は現状を維持していくか、統廃合して学校を1つにしていくか。今いる子どもたちがいかなる環境で教育を受けられるかを第一義に考える必要がある。今の数字を見ていると現状のままいくというのはかなり難しい中で、今いる子どもたちが大崎上島で学んでいける体制を行政として整えていくことが大切。子どもたちが何十年か経って大人になってからこの教育が良かったなと思えるような教育を提供できるように考え、その教育が結果良ければ、島外からも大崎上島で教育を受けさせたいと評価され人が増えていくという流れがよい。どうしたら子どもが増えるか、島外から来てくれるかを考えすぎるのではなく、今いる子どもたちをしっかりと社会へ送り出せる教育とは何なのかという議論をしていくことが大切。</p>
	教育長	<p>まず基本としておきたいのは今いる子どもたち、大崎上島で生まれ育っている子どもたちにとって最も有益な学習環境を作るというのは外せない。現状の良さを再認識し、島内のみなさんに知っていただくことを進めながら、急激に人口が減少していく中でどこかで動きは作っていかねばならない。その動きは具体的に何が一番子どもたちにとって有益であるかを考えていかねばいけない。</p>
	町長	<p>まず行政に携わらせていただいている者として、今現在どういう動きがあるのかということをお伝えしたい。例えば海星高校で、「大崎上島学と銘打って学んでおられますがそれは本当に大崎上島学ですか。小中学校で何を学んでいるか理解して進めておられますか。」と問いかけた。叡智学園では、英語に特化した教育でリーダーを育成すると謳っていますが、「このままでは優等生を国内の大学へ送り出し大学進学の評価を上げているだけにしか見えません。色々な意味でのリーダーになるには何が必要か</p>

協議1	町長	<p>をどのように考えているんですか。」という話をした。高校と地元がどうつながっていくかを考えるときには町と県の教育委員会、また国も含めて一緒になって議論していったらいい。全国から生徒を集めて教育するというのであればしっかりと予算をつけてしかるべきとお話させていただいている。このように大崎上島には全国の教育を受ける環境があるので国や県にはそれなりの支援や協力をお願いしている。海星高校では、寮に入れなかった生徒が6名いるが、これは生徒たちが大崎上島でどのように対応していくのかという手助けを県の教育委員会は地元で丸投げしていることになる。地元で教育を受ける子どもたちが、ある程度の成績を残し18歳まで島で生活し、その後町で仕事ができるという形がとれないかを考えている。それを教育関係、地域が一緒になって考えていき、町の長期総合計画の中にのせていきたいので、町議会ともまとめていきたいと思っている。大崎上島で新しい何かをしようとするときには国や県の支援を受けることができる、そういった中で今度は地域がそのように考えることができる土壌になれるかどうかというのが問われてくる。地域にどう説明して地域がどう思っていたかということをしていかなければいけない。今の教育がどうでこれだけの効果があるということ世に問うてみる、そこがスタートではないか。統合ありきではなく、今何が足りないかということ整理しながら、保護者の意見を聞いていくことが必要。時間をかけてでも日本の中でここの教育が一番いい、教育の島だと言ってもらえるようになりたい。教育の島構想というのは、地元の幼小中の子どもたちがいい教育だと思えるようなものにしていくという前提のもと全体をまとめていくことがすごく大切で、そのためには地元の教育のレベルも上げていかなければいけない。現状を把握し、皆さんと一緒に考えていけば道は自ずと見えてくるのではないか。これからは町行政も教育の場に踏み込んでいったらいいと思いきたいと思い、今回当会議を開催していただいた。一人ひとりみなさんの意見を出し合いながら総意でやっていく、保護者や地域の方の声も聞きながら議論していったらいい。海星高校や叡智学園で学んだ子どもたちが、大崎上島で学んで良かったと大崎上島のためにできることないかなと思ってもらえれば、後々いろんな融合ができてくる。人を増やすことにこだわらなくて、この島のことを思ってくれる方を少しでも増やしていくということ念頭に置きながら行政としてそういった施策を今後1年くらいかけていってほしい。</p>
	不二川委員	<p>変え時変わり時というものがあり、そのチャンスはそうあるものではなくて変え時のタイミングを逃すと、結局現状のまま廃っていく。変え時、機が熟したときに変えることを戸惑ったり先送りするのではなく、変えなければいけないときは機を逃さずしっかり変えていく。当然変えるときには多くの批判等もあるだろうが、人間というのは残念ながら何年か経てば慣れてしまう、当たり前になってしまう。幼稚園、小学校、中学校、町行事等も今いる町民にとって何が一番いいことであるかを考えながら進めていく。変えるときは苦しいし辛いだろうが、町行政のトップがどうすれば今いる子どもたちが安心安全に暮らせるかを念頭に置きながら、変えるタイミングを逃さず進めていけば、何年か経って、やはり変えておいて良かったと思える時代がくるのではないか。子どもたちにとって何が一番良いのかを考えながら、令和12年度に6人の新入学児童を迎えるまでにはある程度道筋をつけておかなければならない。2年前に木江小学校の入学児童が0人だったときに今後の義務教育のあり方についてしっかりと議論しておいた方がよかった。</p>
	取釜委員	<p>今はICTを活用することでいろいろツールができていく。島の未来である子どもたちと高齢者との交流の場を作ることが大事。子どもたちの頑張りを地域の人たちが応援しようとなってくると、大崎上島の教育のブランドができ、大崎上島で子育てがしたいという若い世代の人たちが増えていくのではないかと。</p>

協議1	<p>取釜委員 瀧口委員</p> <p>高田委員</p> <p>教育長</p> <p>町長</p>	<p>子どもの人数が減ったからというネガティブな統合ではなく、付加価値を付けて、その過程で地域の子どもたちにプラスになることはたくさんある。何らかの目的を持った全寮制の学校、特色ある学校、理系に特化した学校などいろんな学校があっっている。今すぐ統合ではないが、子どもの数を考えると割とすぐ近くにその時は来ている。</p> <p>大崎上島中学校にも魅力はあるが、まずは島外の学校に通う保護者や生徒の意見も汲み上げていく必要がある。大崎上島でやっていることを保護者に情報共有や発信することが重要。もう少し本質的な教育に取り組んでもらいたい。「大崎上島学」を幼小中とやっているが、何のためにやっているのかというゴール設定がはっきりとできていない。海外の方から、この島は魅力的で教育に関しても誰も取りこぼすことのない教育で良いなと思いますよって言われるが、もっと子どもの意見を尊重して、それを保護者に発信していくというような子どもに寄り添った教育を期待している。</p> <p>子どもに寄り添った生徒指導を中心とした子どもへの関りというのは教育委員会から各学校へ指導しているが、まだ足りていないと受け止めている。「大崎上島学」については、大崎上島の将来を担う子どもたちを育てようという目的で取り組んでおり、とりわけ中学3年生には目的を理解した上で逆算して取り組んでもらいたいということを年度当初各園校長先生には伝えている。すべての先生方が目的意識をもって目的を共有して子どもへの関りを増やしていただくと今ある課題は少しずつ解決に向かっていくのではないか。</p> <p>私が中学校まではあえてこの島で学ぶことを選んだのは、この島でしかできないことが權伝馬や卓球などたくさんあったから。ゴールデンエイジといわれる10歳までに人の気持ちがかかったり、根気よく続けるなどの感情感覚的な部分が出来上がるため、地元で思春期まで生活するというのはものすごく大切なこと。「大崎上島学」については、よく考えて作成されているので、「大崎上島学」の理念を高校、20歳くらいまでつなげていければよいのではないかと。近い将来木江小学校と東野小学校の児童数がほぼ0に近くなるのかなと思っていたがそうではなく、まだまだいろいろなことを考えることができそう。今日をスタートラインとして、今後委員のみなさんの意見をどう組み立てていくかを事務局にまとめてもらいたい。次回は学力も含めて、地元の高校に自然に入っていけるような環境を作っていくために学校教育のカリキュラム等をどうしたらよいかご意見をお聞かせいただきたい。</p>
その他	<p>瀧口委員</p> <p>町長</p>	<p>中学校のクラブ活動の地域移行について、大崎上島では中学校に指導者がおらず地域移行には時間とお金がかかり、議論も必要と言われているが、議論をしっかりしてスタートしても議論は必要。結局スタートしながら考えていくしかないと思っているが、地域移行について町長の考えは。</p> <p>20年くらい前、県教育委員会から命を受け大崎上島にスポーツクラブを作りませんか町教育委員会に話をしに行ったことがあるが当時は断られた。卓球を例に現状を見てみると、利用クラブというものはできたが、指導者養成というものがなく、子どもたちへの指導もバラバラだったので、指導者を育てる環境作りを相談したことがある。今後はこのような考えをもっておられる方を発掘しながら、組織運営について初めは町が予算措置し、地元と一緒に、スポーツだけでなく地域づくりに関わる各分野を運営できる合同会社などを立ち上げていきたい。これらを長期総合計画に盛り込んでいき、教育委員会、町長部局一緒になってやっていくことが大事だと思っています。その他ご意見はありませんか。</p>
閉会	委員 町長	<p><意見なし></p> <p>私の思いを言う時間が長くなってしまいましたが、自由に活発な意見を交流しながら子どもたちの未来につながるものになりたいと思いますので、これからもみなさんの意見を拝聴しながら進めていきたいと思っております。本日はありがとうございました。</p>

表1 人口推移

年 度	出生者数 (人)	人 口 (人)
平成 26 年度	32	7,987
平成 27 年度	38	7,841
平成 28 年度	31	7,681
平成 29 年度	32	7,568
平成 30 年度	25	7,382
平成 31 年度	32	7,308
令和 2 年度	25	7,144
令和 3 年度	21	6,981
令和 4 年度	14	6,866
令和 5 年度	6	6,957

資料 1

令和 5 年度については、令和 5 年 7 月 31 日の数字。その他は、令和 5 年 3 月 31 日の数字。3 月 31 日の人口は、広島商船 1 年生が転入前のため、1 年間で一番少ない人口となる。

叡智学園は、令和 5 年度で全 6 学年転入済みのため、今後の大幅な増加の見込みはない。

表2 今後の小学校入学予定者数

年 度	小学校入学予定数(人)
令和 6 年度	32
令和 7 年度	25
令和 8 年度	32
令和 9 年度	25
令和 10 年度	21
令和 11 年度	14
令和 12 年度	6

上記表 1 の出生者がこのまま本町に在住し、UI ターン等の転入も無いと仮定した場合の 7 年後の小学校入学予定者数である。

表3 小中学校児童・生徒数推移

年 度	大崎小	東野小	木江小	小学校合計	中学校生徒数
平成 30 年度	132	59	35	226	104
平成 31 年度	127	49	32	208	109
令和 2 年度	124	48	31	203	110
令和 3 年度	121	47	33	201	106
令和 4 年度	127	42	27	196	94
令和 5 年度	120	38	27	185	92

小学校

令和6年度					
大崎小		東野小		木江小	
学年	人数	学年	人数	学年	人数
1	20	1	8	1	5
2	19	2	5	2	5
3	25	3	4	3	0
4	18	4	8	4	6
5	19	5	5	5	4
6	22	6	7	6	4
計	123	計	37	計	24

3校計
184

令和7年度					
大崎小		東野小		木江小	
学年	人数	学年	人数	学年	人数
1	12	1	3	1	5
2	20	2	8	2	5
3	19	3	5	3	5
4	25	4	4	4	0
5	18	5	8	5	6
6	19	6	5	6	4
計	113	計	33	計	25

3校計
171

令和8年度					
大崎小		東野小		木江小	
学年	人数	学年	人数	学年	人数
1	12	1	3	1	10
2	12	2	3	2	5
3	20	3	8	3	5
4	19	4	5	4	5
5	25	5	4	5	0
6	18	6	8	6	6
計	106	計	31	計	31

3校計
168

令和9年度					
大崎小		東野小		木江小	
学年	人数	学年	人数	学年	人数
1	20	1	6	1	5
2	12	2	3	2	10
3	12	3	3	3	5
4	20	4	8	4	5
5	19	5	5	5	5
6	25	6	4	6	0
計	108	計	29	計	30

3校計
167

令和10年度					
大崎小		東野小		木江小	
学年	人数	学年	人数	学年	人数
1	10	1	2	1	5
2	20	2	6	2	5
3	12	3	3	3	10
4	12	4	3	4	5
5	20	5	8	5	5
6	19	6	5	6	5
計	93	計	27	計	35

3校計
155

令和11年度					
大崎小		東野小		木江小	
学年	人数	学年	人数	学年	人数
1	6	1	4	1	3
2	10	2	2	2	5
3	20	3	6	3	5
4	12	4	3	4	10
5	12	5	3	5	5
6	20	6	8	6	5
計	80	計	26	計	33

3校計
139

中学校

令和6年度	
学年	人数
1	33
2	30
3	27
計	90

令和7年度	
学年	人数
1	30
2	33
3	30
計	93

令和8年度	
学年	人数
1	24
2	30
3	33
計	87

令和9年度	
学年	人数
1	29
2	24
3	30
計	83

令和10年度	
学年	人数
1	29
2	29
3	24
計	82

令和11年度	
学年	人数
1	29
2	29
3	29
計	87